

原発の耐震性に異論あり！

能登半島での地震で、志賀原発では1号機の燃料プールの冷却ポンプが約40分停止。

672体ある使用済み燃料を冷やせない状態になったものの2011年から運転停止のため冷えていた水温29.5度そのまま上昇はなかったと報じられました。

冷却不能となった場合、水が沸騰するのに1号機で17日間、2号機で29日かかると北陸電力は説明しています。

福島第一原発で起きたメルトダウンと同様の事態にならなかったことは不幸中の幸いですが、もし稼働中だったら…。

今回は動いた外部電源が福島同様に津波などで使えない事態にならなかったのも決して約束された設定ではありません。

原発の耐震設計基準（基準地震動）に用いられるガルという加速度の単位は、地震観測において震度以上に重要な単位とされますが、今回、志賀原発では震度5強で揺れの大きさを示す加速度は水平方向336ガル鉛直方向で最大329ガルと、想定する最大600ガルを下回ったと報じられました(1/2NHK)。

一方、志賀町の中で2828ガルも計測されているのです(1/3 神奈川新聞▶)。

以下は、大飯原発差止め判決を出した樋口英明元福井地方裁判所裁判長の著書『私が原発を止めた理由』に学んだところです。

この600ガルの基準地震動を安全と見るかどうかを一つの判断材料に樋口裁判長は当時700ガルの基準地震動だった大飯原発に高い耐震性があるとは言えないと判決をくだしました。

著書より引用すれば、表のようになります。

岸田政権が「原発回帰」を進め、昨年12月2日国連気候変動会議で「世界全体の原発容量を2050年までに3倍に増やす」との宣言に日本もいつの間にか賛同する事態となっていますが、年頭に起った震災を改めて考える契機にしなければならないと思うのです。

- 5115 ガル 三井ホーム耐震性
- 4022 ガル 2008 岩手宮城内陸地震 (震度6強M7.2)
- 3406 ガル 住友林業ホーム耐震性
- 2933 ガル 2011 東日本大地震 (震度7 M9.0)
- 2828 ガル 2024 能登地震 (志賀町) ※筆者
- 2515 ガル 2004 新潟中越地震 (震度7 M6.8)
- 1740 ガル 2016 熊本地震 (震度7 M7.3)
- 700 ガル 大飯原発の基準地震動
- 600 ガル 福島第一原発の基準地震動
- 405 ガル 大飯原発建設時の基準地震動



志賀原発

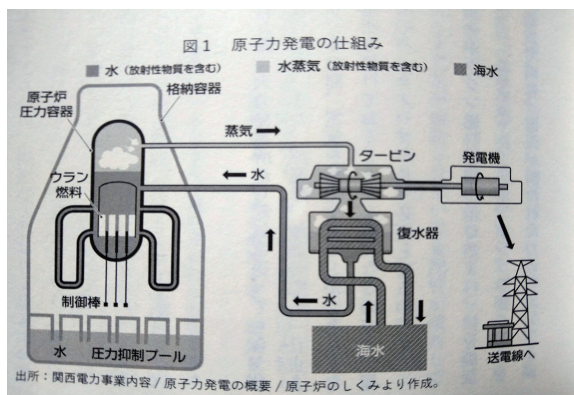
震源断層は150キロ程度
政府調査委 地震活動当分続く

石川県能登半島で1日に起きたマグニチュード(M)7.6と推定される地震を巡り、政府の地震調査委員会(委員長・平田直東(大分県立大教授))は2日、東京都内で臨時会合を開き「震源断層は、150キロ程度の逆断層であると考えられる」との評価をまとめた。一連の地震活動は当分続くとした。

調査委によると、今回の地震は断層面がずれ動いて

発生した逆断層型。石川県志賀町では加速度2828ガルを観測するなど震源付近で強く揺れた。地震活動の範囲は広がっており、地震発生後1週間程度、最大震度7程度の地震に注意が必要とした。

能登半島北部では、2020年12月ごろから地震活動が活発化。22年6月にはM5.4、23年5月にはM6.5を観測するなど同じ地域で地震が続いていた。



私が原発を止めた理由

樋口英明
元福井地方裁判長